

2025～2026 年度

平和スタディツアーを企画しよう！

法政アクティブリサーチ 寺川クラス 1組

児山	和輝
荻原	夢歩
北村	朔士
伊藤	香里奈
榛葉	陽大
吉岡	擢人
木村	真実
井田	穂乃香
清水	貴晴
石津	弘一郎
近藤	竜空
馬杉	英汰
中山	琉空
後藤	千明
古川	仁衣那
倉井	達海

《 目次 》

はじめに

第1章 平和スタディツアーの企画

第2章 行き先を鹿児島に決定したことの理由と経緯

I 予算面

II 知覧特攻平和会館を調査対象として訪問先に決定した理由

(1) 訪問先の選定

(2) 訪問先決定後の準備

(3) 質問項目の検討

第3章 平和スタディツアーへ

I 旅程の検討

II 知覧特攻平和会館へ

(1) 知覧特攻平和会館までの道のり

(2) 語り部の方の講和

(3) 知覧特攻平和会館のまわりを散策したのち鹿児島市内へ

III 感じたことや考えたこと

(1) 特攻隊員と家族

(2) 特攻隊員のまわりにいた人々

(3) 特攻隊や特攻作戦など特攻について今どのように評価できるか

(4) 若い世代への継承

IV エクスカーション

おわりに

はじめに

戦争で亡くなった人々のことを考えたことがあるだろうか。戦後 80 年を迎えた現在、戦争を経験した世代は年々少なくなっており、戦争の記憶をどのように次の世代へと継承していくかが課題となっている。戦争や平和を語る時、私たちは過去の記録を客観的なぞるだけの「安全な観察者」の立場に留まってはいただろうか。私たちが享受する平穏な日常は、過去の人々が積み重ねてきた選択の結果であり、その歴史の延長線上にいる私たち若い世代こそが、次の時代へ平和を維持していく責任を負っているはずだ。その意味でも、戦争の記憶や教訓を受け継いでいくことは、これからの社会を担う私たちの重要な役割である。そこで、同世代の若者が戦争や平和について身近に考え、関心を持つきっかけをつくりたいと考え、平和スタディツアーを企画した。平和学習はその重要性が理解されつつも、一般的な旅行に比べてどうしても重苦しい印象を抱かれがちである。しかし、教室から飛び出し現地を訪問することは、歴史の教訓にじかに触れることができる、座学を越えた大きな価値がある。本企画は、旅行が本来持つ「楽しさ」と、平和学習の「真剣さ」を両立させたスタディツアーを構築し、同世代の若者に向けて平和について考える新たなきっかけを提案することを目的としている。

本報告書では、ツアーの立案から現地訪問までの過程を詳細に記述する。単に成功した計画を報告するのではなく、現地訪問に至るまでの距離や移動ルートへの検討における困難、そして予定通りに進まなかった失敗談までを、あえてそのまま記録した。これらの経験は、これから現地を訪れようとする人々にとって、現実的な指針となるはずである。また、本報告書では、知覧特攻平和会館で展示されていた内容や語り部の方々による説明、本ツアーを通して印象に残った出来事を中心にまとめるとともに、戦争を二度と繰り返さないために、より多くの人が知覧特攻平和会館を訪れ、当時の人々の思いや戦争の現実に触れることの大切さを伝えたいと思い、私たちからいくつかの提案を行っている。現地に行くことでしか感じるものの出来ない経験、そこから何を学んだか、何を考えたのか、平和であるためにはどうすればいいのかなど平和スタディツアーで得られることは多い。私たちが当初考えた個々の企画案から鹿児島・知覧を訪問することに決めた経緯、そして、実際に訪問した経験、気づき、エクスカッション、龍谷大学に帰ってきてから考えたことなど、全てが書かれている。本報告書が、読者、とくに私たちと同じ若い世代の人にとって実践的な学びとなり、次世代の平和スタディツアーを企画する際の道標となれば幸いである。

第1章 平和スタディツアーの企画

私たちが当初提案したスタディツアーの企画は次の 15 件である。¹

	行き先	訪問先	特徴や特色
1	長崎県長崎市	旧城山国民学校校舎 山王神社二の鳥居 長崎造船所資料館 軍艦島（端島）	被爆地の遺構 軍需産業の拠点 戦後復興の象徴都市
2	長野県長野市 上田市	松代象山地下壕 松代大本営平和祈念館 戦没画学生慰霊美術館無言館	本土決戦を想定した天皇、 政府、軍機能の移転 戦没画学生の遺作の展示
3	長野県飯田市 阿智村	飯田市平和祈念館 満蒙開拓平和記念館	731 部隊に関する展示 国策としての満蒙開拓

¹ それぞれの訪問先の特色や学べる内容は、各ウェブサイトおよびデジタル配信記事などを参考に記述している。その一つひとつを注記することは、紙幅の関係上、省略した。関係各所におかれてはご寛恕たまわりたい。

4	鹿児島県鹿屋市	鹿屋航空基地史料館 串良基地跡地下第一電信室	特攻隊出撃基地 特攻隊員からのモールス信号受信
5	東京都千代田区 文京区	靖国神社 遊就館 わだつみのこえ記念館	遺書や遺品 戦没学生の記録
6	山口県周南市	大津島 回天記念館	特攻作戦の訓練基地 回天に関する遺品や資料
7	鹿児島県南九州市	知覧特攻平和会館	特攻作戦の拠点 特攻隊員の遺書や遺品
8	広島県広島市	被爆遺構展示館 旧雑魚場地区 国立広島原爆死没者追悼平和 祈念館	原爆遺構の保存と公開 学徒の作業跡 追悼施設
9	山口県周南市	大津島 回天記念館	特攻作戦の訓練基地 回天に関する遺品や資料
10	福岡県筑前町 福岡県北九州市	大刀洗平和記念館 北九州市平和のまちミュージ アム	特攻隊 大刀洗飛行場 空襲 戦時下の生活 戦後の復興
11	東京都台東区 江東区	東京都恩賜上野動物園 東京大空襲・戦災資料センタ ー	戦時猛獣処分 東京大空襲
12	沖縄県糸満市	ひめゆりの塔 ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり学徒の遺品 生存者の証言映像
13	茨城県笠間市 稲敷郡阿見町	筑波海軍航空隊記念館 予科練平和記念館	神風特攻隊筑波隊 少年飛行兵の訓練学校
14	鹿児島県南九州市 南さつま市	知覧特攻平和会館 万世特攻平和祈念館	特攻作戦の拠点 特攻隊員の遺書や遺品
15	東京都千代田区 江東区	靖国神社 遊就館 靖国八千代食堂 東京大空襲・戦災資料センタ ー	遺書や遺品 富屋食堂の再現料理 東京大空襲

1 長崎の戦争遺構

長崎は、被爆地としての側面だけでなく、戦前・戦中における軍需産業の拠点としての役割、さらに戦後復興を象徴する都市としての側面を併せ持つ。本ツアーでは、長崎に現存する歴史的な「現場」を巡りながら、戦時体制、原爆投下、そして戦後復興に至るまでの過程を立体的に理解することを目的とした平和学習プログラムである。資料や映像による知識の補完にとどまらず、実際にその場に立つことで得られる身体的・空間的な実感を重視し、歴史を「体験として認識する」ことを狙いとしている。

①旧城山国民学校校舎は爆心地から約500mという至近距離に位置していた教育施設で、鉄筋コンクリート造であったため外形は辛うじて残存したものの、爆風と約数千度に達した熱線により内部は壊滅的な被害を受けた。現在保存されている階段棟には、火災によって炭化・変形した木材やレンガがそのままの状態に残されており、爆発のエネルギーが建物に与えた影響を直接的に観察することができる。また、被爆当時の写真や証言資料も展示されており、教育の場であった空間が一瞬にして破壊された現実を具体的に理解できる。ここでは、視覚情報だけでなく空間そのものが記憶する場所として機能している点に大きな特徴がある。②山王神社二の鳥居は爆心地から南東へ約800mに位置しており、爆風によって一方の柱は倒壊し、一本柱となり上部に残された笠木が反対方向にずれている。熱線による立っている柱の爆心側は鉋物が溶け刻字が読めなくなっている。核兵器の破壊力を伝える長崎を代表する被爆遺構の一つである。③長崎造船所資料館は、長崎が担ってきた産業的役割を理解する上で重要な施設である。館内では、三菱創業期から続く造船技術の発展や、日本の近

代工業化の過程が詳細に紹介されている。特に注目すべきは、この資料館自体が1898年に「木型場」として建設された歴史的建造物であり、原爆の爆風にも耐えた現存最古級の工場建屋である点である。戦時中、この造船所では約80隻の艦艇が建造されており、戦艦武蔵のような大型戦艦もその一例である。ここでは、戦争が前線の戦闘行為だけでなく、後方の産業・労働によって支えられていた構造を具体的に理解することができる。④軍艦島（端島）は明治期以降、海底炭鉱の開発によって急速に発展し、日本の近代化および戦時体制をエネルギー供給の面から支えた拠点である。最盛期には人口密度が世界有数の水準に達し、高層鉄筋コンクリート住宅や学校、病院などが密集する独特の都市空間が形成されていた。しかし、エネルギー政策の転換に伴い1974年に閉山され、その後は無人島となった。現在では、崩壊が進む建造物群が当時の生活環境や労働の過酷さを物語る「産業遺産」として保存されている。2015年にはユネスコの世界文化遺産に登録され、その歴史的価値が国際的にも認められた。上陸ツアーでは、実際に島内を歩きながら、時間の経過とともに風化していく建造物と人間の営みの痕跡を直接観察することができる。

2 松代象山地下壕・大本営平和記念館と無言館

第二次世界大戦末期、当時の政府は東京大空襲などをうけ本土爆撃、本土決戦を想定した。天皇、政府、軍の機能を長野県松代に移す計画が進み、地下深くに巨大な大本営地下壕が建設された。松代で国家総動員体制の実態を学び、上田市で市民生活や、戦後の復興の歩みを辿ることで、多角的に考えることができるため長野での企画を考えた。

①地下深くに作られた巨大な大本営地下壕である松代象山地下壕を見学する。松代象山地下壕は皆神山、象山、舞鶴山の三か所が採掘され、総距離10Kmに及ぶ巨大な地下壕である。1944年秋から終戦まで一日も休まず掘り進められた。現在公開されているのは、象山地下壕の500mほど。建設には巨費が投じられ、労働者として多くの朝鮮人が強制的に労働させられたといわれている。内部には「大邱」と書かれている部分があり、大邱とは韓国の地名である。朝鮮人労働者が故郷を思って書いたと考えられる。戦争はこの当時すでに敗北へと傾いており、この地下壕が実際に使われることはなかった。②この地下壕の近くに、松代大本営平和祈念館がある。地下壕の史実を、多くの人が学び、交流する場を提供するとともに平和の尊さを伝え人づくりの推進を図り、地域社会の活性化及び公益の増進のため設立された。③松代から上田市へ移動する。全国でも唯一の戦没画学生慰霊美術館「無言館」がある。130人の画学生による絵画や彫刻が展示され、収蔵庫時の蔵には遺作が保管されている。展示作品の中で特に多いのは人物画で、モデルのほとんどが家族など身近な人である。展示作品には作者がいつ、どこで亡くなったかを知らせる解説が添えられている。

3 飯田市平和祈念館と満蒙開拓平和記念館

日本では、原爆投下や空爆による被害など、主に戦争の被害者としての側面から学習することが多い。しかし、戦争の悲惨さを語るのであれば加害者としての側面からの視点も重視すべきであると考えられる。その視点から学ぶことができる資料館として飯田市平和祈念館と満蒙開拓平和記念館がある。

①旧日本陸軍の731部隊は細菌兵器の研究や外国人捕虜への人体実験をしたとされる。飯田市平和祈念館は、731部隊に関する展示をしていることで注目された。と呼ばれる細菌兵器や捕虜となった外国人に対する人体実験などをしていたとされるに関する展示がされている。②満蒙開拓平和記念館は、長野県が満蒙開拓団の出身者を多く輩出したこともあり設立された記念館である。日本が満州を自国に都合よく解釈した結果、日本人、中国人ともに多大な犠牲を生んだ満蒙開拓の歴史について、満州へ送り込まれた義勇軍や開拓団員、日本からの移民が受けた被害や、その過程での加害の歴史が展示されており、加害と被害の両側面から理解することができる。

4 鹿屋航空基地史料館と串良基地跡地下第一電信室

戦時中に関する資料や海軍の特攻隊員の遺書、活動記録などを通して、新たな視点から学ぶ。海軍の歴史や活動に関しては、鹿児島県鹿屋市に行くことによって戦争時の「海軍」について知ることができ、そこには資料や体験できる場所がある。

①鹿屋航空基地史料館は鹿児島県鹿屋市にあり、鹿屋市では海軍の特攻隊員が飛び立って

いた場所で日本でも最も多くの特攻隊が出撃した歴史があり、鹿屋航空基地史料館には旧日本海軍創設期から第二次世界大戦に至るまでの貴重な資料のほかにも、特攻隊員の遺影や遺書などが展示されている。また、海上自衛隊の活動状況も紹介されている。この史料館の1階では、海上自衛隊航空部隊の発展と過程、その中で活躍する隊員の姿など、現在の海上自衛隊の活動状況が紹介されている。2階には、旧海軍航空隊に身を置いて必死に準備を調べて、身を挺して戦った人々に焦点を当てた海軍航空隊の軌跡などの資料展示がされている。②串良基地跡の地下第一電信室は、串良基地から飛び立った特攻攻撃隊員が突撃前に送る電信を受信するための地下壕であり、敵からの空襲などの攻撃を避けるために地下に作られている。この地下壕は、コンクリート製で深さ約7メートル、全長約51メートルあり、通信室、小部屋、通路で構成されている。現在では、音声ガイドによるモールス信号の再現など当時の様子を体験することができる。

5 靖国神社遊就館とわだつみのこえ記念館

第二次世界大戦では多くの若者が国や家族のために命をかけて戦った。私たちと同年代の青年たちが、どのような思いでその時代を生き、命を捧げたのかを学ぶことは重要である。東京には戦争の悲惨さと平和の大切さを学べる場所が数多くあり、その中から二か所を取り上げる。

①靖国神社は明治2年に明治天皇の意向によって創建された招魂社を起源とし、国家のために命を捧げた人々の御霊を慰め、その事績を後世に伝えることを目的としている。ここには、第二次世界大戦などの戦争で亡くなった人々、約246万6千柱の神霊が祀られている。靖国神社の境内には、遊就館という資料館がある。遊就館では、靖国神社に祀られている人々の遺書や遺品をはじめとする貴重な史資料が展示されており、戦争の実態や当時の人々の思いを具体的に知ることができる。館内の常設展示では、10万点に及ぶ収蔵品の中から、刀剣類・武器甲冑・武器類などの他、零式艦上戦闘機(ゼロ戦)を始め、人間魚雷「回天」、九七式中戦車などの大型兵器を含め約3千点を展示しており、当時の戦争の様子を視覚的にも学ぶことができる。②わだつみのこえ記念館は、かつてベストセラーとなった手記集『きけ わだつみのこえ』に由来し、戦争で命を落とした学生たちの声を現代に伝えることを目的としている。建物は本郷の一角にあり、大きな施設ではないが、静かな空間の中で当時の学生たちの思いに向き合うことができる場となっている。館内では、戦没学生が戦地から送った手紙やはがき、学生時代の日記、ノート、手紙、歌集、そして遺書などの実物、その書き起こし、書き手の写真と履歴が添えられている。

6 大津島 回天記念館

太平洋戦争末期、日本は各国から反撃を受け形勢が不利になっていった。そんな中起死回生の一手として、脱出装置のない魚雷に人が乗り込んで操縦し、敵艦へ突撃する「回天」という特攻作戦が開始された。「天を回らし戦局を逆転させる」と願いが込められた回天。私たちと変わらない若い兵達が、国のため、未来や平和のために自らの命を捧げなければいけなかった戦争の悲惨で残酷な状況を学ぶことで、平和の尊さを深く感じることができると考える。

そんな回天について知ることが出来る施設が山口県の大津島にある。大津島はかつて回天の訓練基地が作られ、今でも全国で唯一当時の施設が残っている場所である。回天は操作手順が複雑で、一旦停止や後退、エンジン停止などの機能はなく操縦は非常に難しかった。しかし、設計や政策をやり直す余裕がないため、不完全なまま正式に兵器として承認された。そのため訓練中の事故が多発し、15名が訓練の最中に亡くなっている。その他にも回天を整備工場から訓練基地までトラックで運搬する際に使用されたトンネルがあり、大津島小学校の敷地内には変電所や危険物貯蔵庫など当時の痕跡が多く残っている。これら関連施設を訪れることで、兵士達がかつて歩いた道を追体験し、彼らの置かれていた状況や思いに触れることができる。

また大津島には回天に関わる遺品や資料を展示している回天記念館がある。回天の歴史や時代背景、当時の生活などがパネルで展示されていて、回天を通じ平和について考える施設となっている。

7 知覧特攻平和会館

鹿児島県南九州市知覧に残る特攻関連の施設や跡地を巡りながら、戦争の歴史について理解を深める。

①知覧特攻平和会館では、特攻隊員の遺書や遺品、出撃当日の写真などが展示されており、当時を生きた若者たちの思いに触れることができる。展示を通して、彼らがどのような気持ちで出撃していったのか、家族や祖国に対してどのような思いを抱いていたのかを知り、戦争の悲惨さと命の重さについて考える時間としたい。また、もし自分が同じ立場だったらどう感じるかという視点を持ちながら見学することを意識する。②平和会館の周辺には弾薬庫や油脂庫などの関連施設がある。弾薬庫は戦闘に必要な弾薬を保管していた場所であり、戦争の準備が日常の中で行われていたことを実感できる跡地である。油脂庫は出撃前の燃料を保管していた場所であり、特攻が実行されるまでに多くの準備が行われていたことを示している。③特攻平和観音像は、特攻隊員の霊を慰めるために建てられたものであり、静かな環境の中で、若くして命を落とした人々に思いを寄せながら、自分なりに戦争や命について考える時間を持つことができる。④付近には当時を再現した料理を味わうことができる知覧茶屋がある。

8 広島戦争遺構

第二次世界大戦末期、広島と長崎に原子爆弾が投下され多くの罪のない人々の命が奪われた。今まで通りの日常を過ごしていただけだったが原子爆弾によって破壊された。広島平和記念資料館や原爆ドームは修学旅行などでも訪問する機会が比較的多い場所だが、それら以外にも、戦争遺構が多く残っている。

①被爆遺構展示館は平和記念公園の中にあり、原爆によって破壊された町のそのままの跡を見られる場所である。もともとこの場所には「中島地区」というにぎやかな街があり、多くの人々が暮らしていた場所となっていた。原爆によって破壊された、地下に残っていた遺構を掘り起こし、そのままの状態に保存、公開している。②旧雑魚場地区は広島平和記念公園がある場所一帯のことで戦前の広島市中心部の町の一つである。この地区では学徒が建物疎開作業中に被爆した地域といわれており、建物は存在しないが現地に案内板があり、学徒の作業跡や犠牲者の名前を記した碑がある場所となっている。③国立広島原爆死没者追悼平和祈念館も平和記念公園の中にある。原爆で亡くなった人々を追悼することや原爆の被害を伝えること、平和について考えることを目的とした場所であり、「展示を見る」よりも「祈るための空間」だとされている。

9 大津島 回天記念館

太平洋戦争で大日本帝国海軍が開発した人間魚雷であり、日本軍初の特攻兵器「回天」について学ぶことができるのが山口県周南市にある回天記念館である。回天には脱出装置はついていないため、出撃は「死」を意味するものであり、水中から命をかけて戦った特攻隊員と回天について知り、平和について考える機会にするためである。

回天記念館では回天に関する遺品や資料の展示に加え、当時の時代背景、生活などについてパネル展示等がされている。1300を超える遺書や手紙のほか、元搭乗員たちが展開について語る映像資料も見ることが可能だ。これらの展示物を通して戦争や回天での攻撃が意味することの残酷さ、そして特攻隊員や大尉・中尉など様々な立場から当時の様子を学ぶ。回天記念館の周囲には回天訓練基地跡や回天運搬トンネル、回天整備工場といった関連施設がある。また、敷地内には、変電所、危険物貯蔵庫、点火試験場などの施設が今でも残っている。特攻隊員などが実際に通った回天搭乗員兵舎へ続く階段や、島民が通る道と工場の境目には秘密を守るためとされるコンクリートの壁なども見受けられる。当時のまま残された様々な施設を通して、戦争というものがどのようにして行われていたのか学び、想像する。

10 大刀洗平和記念館と北九州市平和のまちミュージアム

戦争について学ぶ際、広島や長崎といった原爆の被害地に焦点が当てられることが多いが、特攻や空襲といった側面に着目し「加害」と「被害」の両面から戦争を捉えることも重要である。

①大刀洗平和記念館は、かつて大刀洗飛行場が存在した場所に建てられており、太平洋戦

争中には多くの若者が特攻隊員としてここから出撃した歴史を持つ。館内には当時の資料や写真、遺書、映像などが展示されており、戦争が若者一人ひとりの人生にどのような影響を与えたのかを具体的に知ることができる。「若者の目線から見る戦争」である。若者がどのような思いで出撃していったのかを考えることで、戦争の現実とその残酷さ、そして命の重さについて理解を深めることができる。また、戦争を単なる歴史的事実としてではなく、個人の人生の問題として捉える視点を養うことも重要である。②北九州市平和のまちミュージアムは、北九州市における戦争被害と戦後復興の過程について展示されている。具体的には、市民の空襲体験や戦時下の生活、戦後の復興とまちづくりの歩みなどを学ぶことができる。「復興の中に見る平和の力」である。戦争によって大きな被害を受けた地域が、どのようにして再び立ち上がり、現在の社会を築いていったのかを知ることが、平和の意味を考える上で非常に重要である。市民が困難を乗り越えながら地域の絆を取り戻していく過程を学ぶことで、平和とは単に戦争がない状態ではなく、人々の努力によって築かれるものであるという認識を深めることができる。大刀洗では「加害」の側面に触れ、北九州では「被害」とのその後の再生の過程を学ぶ。

1 1 東京都恩賜上野動物園と東京大空襲・戦災資料センター

「Zoo is the Peace. (動物園は平和そのものである)」——これは、戦前から戦後にかけて上野動物園長だった古賀忠道が残した言葉である。動物園が単なる娯楽施設ではなく、平和の象徴であることを示した言葉である。第二次世界大戦中の昭和18年、戦況の悪化に伴い日本各地の動物園では凄惨な事態が引き起こされた。空襲によって檻が破壊され、逃げ出した猛獣が市民に危害を及ぼすリスクを排除するという名目のもと、東京都長官の命令により猛獣を殺害する「戦時猛獣処分」が実行されたのである。

①上野動物園は童話『かわいそうなぞう』で知られる。ほかにもライオンやトラといった肉食動物から草食動物まで、東京都の指示により14種27頭もの動物が犠牲となった。戦争が終結した時点で生き残っていた大型動物はキリンのみであり、戦後の復興期には都民の深刻な食料不足を補うという実利的な目的から、一時的にブタやアヒルを飼育するという状況も経験している。園内には太平洋戦争で犠牲となった動物や動物園で亡くなった動物の霊を慰めるために設けられた慰霊碑がある。②東京大空襲・戦災資料センターでは、動物園での猛獣処分命令の直接的な背景にあった空襲の実態について学ぶ。本施設は民設民営で運営されており、入館料と寄付で戦争の記憶を伝承している点が特徴的である。常設展示は東京の空襲をメインテーマとして、「戦時下の日常」「空襲の実相」「空襲後のあゆみ」「証言映像の部屋」という4つのコーナーで構成されている。また、定期的な講演会や、企画展のほか、予約をすることで空襲体験者の方から直接の講話を受けることができる。

1 2 ひめゆりの塔とひめゆり平和祈念資料館

第二次世界大戦末期、沖縄本島南部で激しい地上戦が行われていた。当時、日本軍は兵士の看護や食事の世話、負傷兵の搬送などに女子学生を動員していた。空気も光も少なく、爆撃音が絶え間なく聴こえる地獄の空間に突如放り込まれた後に、砲弾が飛び交うなか行き場を失った少女たちは銃弾や砲撃に巻き込まれたり、自決を選んだりして過半数が亡くなった。

①ひめゆりの塔は沖縄陸軍病院第三外科が置かれた墓の跡に立つ慰霊碑であり、石碑には「いはまぐらの碑」「いはまぐら かたくもあらん やすらかに ねむれとぞいのる まなびのともは」と彫られている。今の日本の平和さを実感する。②ひめゆり平和祈念資料館はひめゆりの塔の奥にあり、ひめゆり学徒の遺品、写真、生存者の証言映像、南風原の陸軍病院壕の一部や伊原第三外科壕内部を再現したジオラマなどを見ることができる。資料館には彼女たちの遺品や証言が展示されており、戦後に語られ始めた当時の悲惨さを伝える貴重な記録が多く残されている。

1 3 筑波海軍航空隊記念館と予科練平和記念館

第二次世界大戦中、現在の茨城県笠間市に、海軍の飛行兵を養成するための筑波海軍航空隊が置かれていた。この地は映画『永遠の0』や『ゴジラ-1.0』のロケ地としても知られる戦争遺構である。

①筑波海軍航空隊は、1938年に編成され、終戦までの間に1500人以上が戦闘機を操縦する訓練を受けた場所である。戦争末期の1945年には、戦況の悪化に伴い「神風特攻隊筑波隊」が発足した。結果として、学生を含む約70人の尊い命が特攻により失われることとなった。現在でも、敷地内やその周辺には、筑波海軍航空隊の司令部庁舎や滑走路などが、ほぼ当時の姿のまま保存されている。②予科練平和記念館は、10代の少年たちがエリート飛行兵を目指した訓練学校の中心地であった阿見町に位置している。「予科練」とは、海軍の飛行機乗りになるための基礎訓練を受ける制度のことである。当時の教科書や宿舍の再現展示、そして特攻隊員の遺書などを通じて、彼らの青春と命の尊さを強く伝えている。ここに入隊した少年たちは、現在の中学生や高校生と同じ年齢であった。彼らが部活動で汗を流したり、友人と遊びに行ったりする代わりに、国のために戦う訓練に明け暮れていたという事実は、同じ若い世代である私たちが平和の意味を考える上で非常に重要な視点を与えてくれる。若者たちがどのようにして自らの命を犠牲にする作戦に巻き込まれていったのかを学ぶことができ、同世代の若者が何を思い大空へと飛び立っていったのか。その足跡をたどるとは、これからの平和を構築する私たちにとって欠かせない学びの機会となるはずである。

1.4 知覧特攻平和会館と万世特攻平和祈念館

「戦争の記憶を次世代へ」をテーマに、鹿児島県南九州市および南さつま市にある戦争関連施設をめぐる。

①知覧特攻平和会館は、陸軍の特攻基地として知られる知覧飛行場の歴史を伝える施設である。館内には特攻隊員の遺書や手紙、写真、遺品などが展示されている。特に出撃前に家族へ宛てて書かれた手紙や遺書からは、死を目前にした若者たちの複雑な心情や家族への思いを感じ取ることができる。平和会館の近くにはホテル館「富屋食堂」がある。「特攻の母」と呼ばれた鳥濱トメが営んでいた食堂を保存した資料館である。出撃前の特攻隊員たちが最後の時間を過ごした場所でもあり、当時の様子を伝える写真や遺品が展示されている。②万世特攻平和祈念館は陸軍最後の特攻基地であった万世飛行場跡地に建てられた施設である。戦争が人々の人生に（とくに若者の人生に）与えた影響について考える機会となる。平和の大切さを再認識するとともに、戦争の記憶を風化させないために何ができるのかを考える機会としたい。

1.5 靖国神社遊就館、靖国八千代食堂と東京大空襲・戦災資料センター

第二次世界大戦下、日本のために命を捧げた多くの若者たちがいた。東京都千代田区皇居のほぼ北側に靖国神社がある。

①靖国神社境内にある博物館「遊就館」は明治15年に創設された。ここでは、戊辰戦争から太平洋戦争まで、日本が関わった近代の戦争に関する資料や戦地で命を落とした人々の手紙や遺影などの遺品が展示されている。零式艦上戦闘機52型なども展示されている。戦場へ向かう若者たちの心情や、時代背景を学ぶことで、戦争がもたらす悲しみと、平和の尊さを深く考える機会となる。神社内にある食事処「靖国八千代食堂」は鹿児島県知覧にある「富屋食堂」で鳥濱トメさんの味を再現した玉子丼(1100円)、また、遊就館1階玄関ホール 茶寮「結」では海軍割烹術参考書のレシピに基づいて作られている海軍カレーを食べることができる。②『東京大空襲・戦災資料センター』では東京大空襲について、モノ（実物）・写真・体験（体験記、体験画）・映像・証言などの資料に、再現・模型の展示などを組み合わせ、空襲にあう前の人びとの暮らしはどのようなものだったのか、空襲で人びとはどのような体験をしたのか、空襲後、人びとはどう生き、日本社会は空襲や被害者のことをどう受け止めてきたのかについての展示が行われている。悲惨な歴史を“遠い過去”としてではなく、“今を生きる私たちにつながる現実”として捉え直すことができるだろう。

第2章 行き先を鹿児島に決定したことの理由と経緯

I 予算面

第1章で挙げた15か所のうち企画対象とする1か所を決定するにあたり、予算面については次の諸点を考慮した。

- ・若い世代とくに大学生が訪問することを想定しているため、高額にならないようにする。
- ・ツアー日数は1泊2日をまずは想定するが、場合によっては2泊3日も可とする。
- ・鹿児島までの往復だけでなく、現地においても公共交通機関を利用する。
- ・飛行機の利用料金はなるべく低価格を選択する。
- ・宿泊施設は立地や信頼性を重視しそのために最安の施設でなくてもかまわない。

株式会社リクルートが発表している「じゃらん観光国内宿泊旅行調査 2025」（じゃらん「とーりまかし」vol. 81, 2025年9月号）によれば、2024年度（2024年4月～2025年3月）における「宿泊旅行実施者の1回の旅行当たり平均宿泊数」は18～29歳男性が1.79泊、18～29歳女性が1.68泊となっている。また、「1回の国内宿泊旅行にかけられた費用」は、18～29歳男性が総額64,400円（内訳は宿+交通費32,500円、現地消費31,900円）、18～29歳女性が総額61,800円（内訳は宿+交通費33,100円、現地消費28,700円）である。² 1泊2日の国内旅行の場合、18～29歳の男女とも、宿泊費と交通費を合わせて33,000円前後であることから、法政アクティブリサーチの交通費補助が1人あたり32,000円であることについて合理的な金額であることが分かる。もっとも、新幹線指定席で京阪神地区から東京へ往復すると、新幹線代金だけで京都～東京間28,340円、新大阪～東京間29,440円、新神戸～東京間30,980円であり、行き先によっては宿泊する場合、受講生の自己負担金が必要となる。

なお、この調査は「観光などを目的とした宿泊を伴う国内旅行（出張・帰省・修学旅行などを除く）」の実態を調べたものであることから、現地消費のうち観光施設への入場料などが比較的大きなウェイトを占めているのではないかと想像できる。平和スタディツアーの場合、訪問先施設への入場料（施設維持費など別名目の場合もあるがそのような場合も「入場料」とする）は比較的安価であることが多く、入場無料のところもある。そうすると、現地費用として必要なものは施設入場料と食事代であり合わせて4,000円もあれば十分であろう。

以上のことから、1泊2日の場合、交通費+宿泊費33,000円、現地消費4,000円、計37,000円が目安となる。

II 知覧特攻平和会館を調査対象として訪問先に決定した理由

(1) 訪問先の選定

第1章で紹介したように、当クラスの訪問先候補は15か所である。授業のなかで、受講生全員がプレゼンテーションを行い、訪問先を1か所に絞った。プレゼンテーションはまず企画案（一次案）を発表し、それに対する担当教員からのコメントに基づき、次回授業時に企画案（二次案）を発表した。そのうえで、それぞれの特色や平和学習の意義などについて検討し、受講生全員で話し合った結果、鹿児島県南九州市所在の知覧特攻平和会館を訪問先とすることに決定した。

当初1泊2日でのスケジュールを検討したが、鹿児島市内から知覧特攻平和会館への往復と現地での調査時間をふまえると、公共交通機関（バス）を利用した場合、朝出発し夕方戻るという日中の明るい時間帯をほぼすべて使うことが分かった。そのため、1泊2日では十分な調査ができないと考えたため、2泊3日のスケジュールを組むこととした。その経緯は次の通りである。

1泊2日から2泊3日への変更は当初よりあまり想定されていなかったこと（なるべく1泊2日で訪問することを想定していた）と、2泊3日のスケジュールの場合、参加できない受講生がいる可能性があることを考慮し、訪問先を変更することも検討した。1泊2日で訪問できる代わりに調査対象として、いわゆる「人間魚雷」という特攻作戦について学ぶことができる、山口県周南市大津島所在の回天記念館が候補となった（回天記念館はクラスのなかで2名が候補地に挙げていたことも考慮された）。しかし、受講生の意向を確認したところ、「みんなで話し合っただけで決めたのだから、2泊3日になっても、鹿児島へ行きたい」とい

² 株式会社リクルート ウェブサイト <https://jrc.jalan.net/wp-content/uploads/2025/08/Vol81-X4.pdf>（閲覧日 2026年6月10日）。

う声が多く聞かれ、訪問先は知覧特攻平和会館を維持し、2泊3日でスケジュールを組むことになった。

鹿児島までの往復で利用する飛行機については、利用1か月前までに予約すると（春休み期間中で最安値ではなかったものの）、片道10,000～15,000円で購入可能であり、また、鹿児島市内の宿泊費は1泊あたり5,000～6,000円であることが分かった（土曜日に宿泊した場合は1泊あたりの宿泊費が高くなるが、それでも1泊10,000円を超えることはなかった）。³ そのため、各自の出発地から大阪国際空港や関西国際空港までの交通費や鹿児島空港から鹿児島市内までの交通費を除くと、飛行機にかかる交通費が往復で20,000～30,000円、宿泊費が2泊で10,000～12,000円となり、交通費+宿泊費の合計が30,000～42,000円になるという見込みを立てることができた。

知覧特攻平和会館を訪問先として決定したのは、おもに次の理由による。

- ・第二次世界大戦の末期、20歳前後という私たちと同年代の若者たちが特攻作戦において、祖国のために命を捧げた。知覧特攻平和会館には遺品や遺書が展示されており、特攻隊員たちが何を考え、どのような日々を最後に過ごしていたのかを知ることができる。
- ・戦争の悲惨さを学び、特攻隊員が今を生きる私たちにどのような思いを残していったのかを感じることができる。
- ・会館の建物の周辺には当時の油脂庫や弾薬庫、訓練施設なども残っており、戦争遺構としての価値を探ってみたい。

このように、今回の平和スタディツアーにおいて、私たちは15か所の行き先候補の中から鹿児島の知覧特攻平和会館を選択した。鹿児島に決定した理由は、今述べたように、平和学習にとってきわめて有益・有用であることもさることながら、予算面と若い世代である私たちが実際に訪れることができる地理的な条件を考慮したことにもよる。飛行機を利用して無理のない日程で訪問できる場所であり、宿泊費や移動費も合理的な範囲であると判断した。⁴ また、最終的な行き先は私たち全員で話し合って決定した。決定する際は、単に興味や希望だけでなく、金銭面の負担、かかる日数、移動手段などの現実的な要素も検討材料とされた。知覧特攻平和会館を調査対象として選んだ理由は、特攻隊員という私たちと同年代

³ 鹿児島市内にはきわめて多くの宿泊施設があり、春休み期間中ではあったが、比較的安価に利用することができた。「天文館」という大きな繁華街があり、鹿児島空港へのバスや知覧方面に向かうバスの利用には、その周辺で宿泊することが便利である。しかしながら、その周辺はいわゆる「夜の街」という側面もあり、大学生の宿泊利用としての適切性を考慮すると、天文館ならびにその周辺からは離れた場所に宿泊したほうがよいと考えられた。また、天文館ならびにその周辺から離れた宿泊施設の場合、宿泊費用を若干抑えることができるというメリットもある。より低廉な宿泊施設もあったが、保護者の方々に安心していただく必要があり、安全な立地も考慮したうえで、今回のスタディツアーではホテルリブマックス BUDGET 鹿児島とした（JR 鹿児島駅徒歩4分、鹿児島市営電車「水族館口」「桜島栈橋通」駅徒歩2分）。フロント前には打ち合わせができるスペースがあり、現地訪問の前日に打ち合わせをするのに利用した。また、ホテル前にスーパーマーケットがあったことも便利である。なお、高層階の部屋からは桜島が見えるそうだが、私たちの部屋からは見ることができなかった。桜島へ渡るフェリー乗り場（鹿児島港桜島フェリーターミナル）までは徒歩5分程度である。

⁴ このクラスの授業担当教員は、1泊2日から2泊3日に日数が延長することについて、費用面と往復の行程距離の長さからやや心配していたそうである。また、鹿児島市内から知覧までの公共交通機関はバス利用となり（乗合バス）、片道1時間30分程度かかることを心配していたという。レンタカーを数台借り、分乗して向かうよりはバスのほうがもちろん安全だが、乗合バスに1時間30分も揺られるという経験はあまりないことであり、「鹿児島という遠いところまでわざわざ行かなくても、もっと近い場所のほうがよいのではないか」と内心思っていたらしい。しかし、実際に現地訪問を終え鹿児島市内に戻ってきた際、当該教員は「ここまで来てよかった」と言っていた。

の若者が必死条件の前にどのような日々を過ごしていたのか、どのような思いで特攻作戦に加わったのかを知ることにより、平和の大切さを学ぶという平和学習の効果の高さにある。このような経緯を経て、私たちは、鹿児島へ、知覧特攻平和会館への訪問を最終的に決定した。

(2) 訪問先決定後の準備

知覧特攻平和会館への訪問を決定した後、法政アクティブリサーチの授業の一環としての訪問、当クラスが調査する内容とその目的を簡潔にまとめた訪問依頼文を作成することになっていたが、同会館への訪問については、所定の申込書に必要事項を記入のうえファックスで送信するか、ウェブ入力による団体予約をするかのいずれかの方式となっている。そのため、ウェブ入力による団体予約をすることとし、あわせて、「語り部の講和」も予約した（「語り部の講和」については後述する）。入館および講和予約の日時確定の返信メールが届き、2026年3月23日（月）午前11時15分に知覧特攻平和会館を訪問することが決まった。

(3) 質問項目の検討

現地での聴き取りに際し事前に質問内容を検討した。これには本学が導入しているmanabaを用いた。⁵知覧特攻平和会館のウェブサイトやその他の資料を事前に用意し、受講生1人あたり5～6個の質問を考え、全員がmanabaのレポートに提出、それらを項目ごとにまとめた。質問項目は次の通りである。

1 特攻及び特攻作戦について	
<input type="checkbox"/>	特攻という作戦は、当時の軍事的な観点から見て、どの程度有効だったのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	映画などでも特攻を見ることがあります。特攻は本当にあのようなものなのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	特攻作戦を進めていくにあたり、当時の空気感や周りの影響はどの程度あったと考えられますか。
<input type="checkbox"/>	当時の日本では、特攻についてどのように報道され、報道によって当時の人々は特攻についてどのような印象を持っていたのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	知覧という場所の意味についてお尋ねします。なぜ知覧に特攻の基地を作ったのでしょうか。また、九州には他にも特攻基地がありましたが、なぜ知覧からこれほど多くの隊員が出撃することになったのでしょうか。地理的な条件などがあったということでしょうか。
<input type="checkbox"/>	特攻作戦は成功率が低かったとも聞いたことがあります。成功率が低かった理由は、途中で撃墜されたことのほかに、何か理由がありましたか。
<input type="checkbox"/>	帰還する人の割合は、やはりわずかだったということでしょうか。
<input type="checkbox"/>	特攻作戦は当時の日本にとってどのような意味があったと思いますか。
<input type="checkbox"/>	平和会館のホームページで見たのですが、「特攻作戦に至る経緯」の中で、「（敵国に）嫌戦気運が広がり、互いに損害を出さないようにするために停戦になるのではないか、という期待を（当時の日本）政府はしたのでは」と書かれていました。特攻作戦を受けた敵国では、停戦しようという動きがあったのでしょうか。

2 特攻隊員について	
<input type="checkbox"/>	特攻隊員の方々は志願されたとされていますが、本当に自分の意思だけで決めたのでしょうか。つまり、実際のところ、どの程度ご本人の意思によるものだったと考えられていますか。当時の社会における空気なども含めて教えていただけますか。

⁵ 株式会社朝日ネットによるクラウド型教育支援サービスである。manaba ウェブサイト <https://manaba.jp/products/>（閲覧日 2026年6月10日）。

<input type="checkbox"/>	特攻隊員の方々が感じていた恐怖や葛藤については、どのように理解されているのでしょうか。また、それらはどのように扱われていたと考えられていますか。
<input type="checkbox"/>	ホームページに掲載されていた手紙や遺書を拝見しました。決意や前向きな言葉が多いように感じたのですが、特攻隊員が家族へ手紙や遺書を書いて送る際、軍の検閲を受けていたのでしょうか。もし検閲を受けていたのであれば、特攻隊員たちの本音は手紙や遺書には表れていなかったのではないかと考えられますが、特攻隊員たちの本音はどのようなものだったのでしょうか。また、手紙や遺書はどのようにして家族のもとへ送られたのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	特攻隊員は、出撃を拒否することはできたのでしょうか。拒否した場合、特攻隊員はどのように扱われていたのですか。
<input type="checkbox"/>	特攻隊員には、おもにどのような人が志願したのでしょうか。また、志願する人が少なかった場合は、どのような人が選ばれる傾向がありましたか。特定の階層や生活水準など共通点はあったのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	特攻隊員は自分が必ず戦死する作戦に参加することについてどのように受け止めていたのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	特攻隊員の中で生還した方々の証言には、何か「共通点」や（共通する）「思い」のようなものがありますか。
<input type="checkbox"/>	母によく「時代が違えば僕達も特攻隊の一員になっていたかもしれない」と言われることがあります。当時、息子を送り出していた親達はどのように思っていたのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	知覧基地から出撃した特攻隊員は出撃前にどのような生活を送っていたのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	特攻隊員を支えていた人々はどのような役割をしていたのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	特攻隊員には僕たちと同じ10代の人もいたそうですが、出撃の直前、彼らはどんな話をしたり、どんな気持ちで過ごしたりしていたのですか？
<input type="checkbox"/>	なでしこ隊との交流についてお尋ねします。特攻隊員の身の回りのお世話をしていた、同世代の女子学生（なでしこ隊）とは、当時どのような交流があったのか？

3 特攻や特攻作戦、特攻隊員をめぐる認識について	
<input type="checkbox"/>	この特攻という出来事の捉え方について、職員の方々の間でも見方が分かれることはあるのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	こちらで長くお仕事をされる中で、特攻に対するご自身の見方が変わったと感じることはありますか。もしあれば、どのような点が変化されたのかお聞きしたいです。
<input type="checkbox"/>	特攻隊員の平均年齢が、私たちとほとんど変わらないことを知りました。知覧には多くの特攻隊員の手紙や遺書が残されていますが、それらを読まれていて、当時の若者と今の私たち大学生との共通点や違いはどこにあると感じますか。
<input type="checkbox"/>	戦後から現在にかけて、特攻についての認識に変化があったと感じる部分があれば教えてください

4 特攻平和会館について	
<input type="checkbox"/>	知覧特攻平和会館の特徴についてお尋ねします。戦争や平和に関する他の資料館と違うところ、「ここに来ればこれが学べる」というところについて教えてください。
<input type="checkbox"/>	特攻のことを美化しないで伝えるために、展示を工夫することを意識されているように感じられます。どのようなことを意識されていますか。
<input type="checkbox"/>	展示されている遺書や手紙についておたずねします。多くの遺書や手紙が展示されていますが、これらはどのように集められたのですか。また、どのような経緯でご家族から平和会館に託されたのでしょうか。また、託されたときに、ご家族の方からメッセージなどはありましたか。

<input type="checkbox"/>	80年近く前の手紙や遺品を今もきれいに残しておくために、一番苦労されていることは何ですか。
<input type="checkbox"/>	戦争を直接経験した世代が少なくなる中で、私たちのような世代に当時の時代の雰囲気伝えていくことは簡単ではないと思います。平和会館として特に工夫されていること、あるいは難しさを感じていることは何でしょうか。
<input type="checkbox"/>	海外からの来館者は多いのでしょうか。もしそうであれば、文化や歴史認識の異なる方々に特攻の歴史を伝える際、どのような工夫や配慮をされていますか。また、海外からの来館者はどのような反応をされますか。
<input type="checkbox"/>	展示されている遺品の中で、一番当時の生活感が伝わってくるものは何ですか？
<input type="checkbox"/>	展示についておたずねします。この平和会館に来た人には、とくにどのようなことを感じてほしいと考えていますか。また、それを感じてもらうために、何か工夫をされているところがあるとすれば、それはどのようなものか教えてください。
<input type="checkbox"/>	(1つ上の質問に関連して)若い人たちがこの平和会館を訪れたときにとくに感じてほしい展示は何ですか。また、若い人たちに伝えたいメッセージはございますか。
<input type="checkbox"/>	「戦争の記憶をどのように次世代へ伝えるか」という点について、平和会館ではどのようなことを大切にしていますか。
<input type="checkbox"/>	この場所でお話しをされるというお仕事をされている意義について、ご自身ではどのように捉えていらっしゃるでしょうか。差し支えない範囲で教えてください。
<input type="checkbox"/>	基地跡の一角に知覧特攻平和会館を建設されたとありますが、当時の基地はどれほどの大きさだったのでしょうか。

5 若い世代への継承について	
<input type="checkbox"/>	若者に戦争の悲惨さが分かってもらえるようにするにはどう伝えたらいいと考えていますか。
<input type="checkbox"/>	私たちのような若い世代が特攻というテーマに向き合うとき、どのような視点を持つことが大切だと考えていますか。
<input type="checkbox"/>	若い世代に過去にあった事実を「自分のこと」としてとらえてもらうために、展示方法などで工夫していることはありますか。
<input type="checkbox"/>	最近の若い世代や外国の方などが「神風特攻隊」をなにかの比喩に使っていることをよく目にしますが、歴史を正しく伝えていくお立場の方として、そのことについてどのようにお感じになりますか。また、私たちの世代は特攻についてどのように理解していくべきでしょうか。若い世代が特攻の歴史について理解する上で「これが重要だ」ということがあれば教えてください。
<input type="checkbox"/>	戦争中の経験者が少なくなっている今、若い世代の人たちが、戦争についてより深く学び、その知識を共有しなければならないと思います。私たちは、授業のなかで、どうやったらよいか？ということを考えているのですが、より多くの人に戦争の悲惨さや苦しみを「正しく理解してもらう」には、どのような方法で広めていけばよいでしょうか。私が考える上でのヒントのようなものがあれば教えてください。
<input type="checkbox"/>	戦争体験者が少なくなっている今、戦争を次の世代に伝えていくことにはどのような意義があると思いますか。また、そのために、この平和会館はどのような役割を果たしていると考えますか。
<input type="checkbox"/>	現在の若い世代が平和を守るためにどのようなことを意識したり行動したりすることが大切だと思いますか。
<input type="checkbox"/>	特攻隊員について学ぶことは、これからの平和について考える上でどのような役割があると考えますか。
<input type="checkbox"/>	戦争の記録を残し続けることにはどのような意味があると考えますか。
<input type="checkbox"/>	戦後80年という節目も迎えましたが、改めて戦争に対して思うこと・伝えていきたいことはありますか。
<input type="checkbox"/>	過去の戦争から多くの苦しみや悲しみを学んでいるはずなのに、なぜ未だ世界では

	戦争がなくならないのでしょうか。
<input type="checkbox"/>	戦争を知らない私たちが、これから平和な毎日を守っていくために、今日からできることは何だと思えますか？
<input type="checkbox"/>	この経験を通して平和の尊さを学んだ後、日常生活に戻ったときにこの学びを思い出で終わらせないためには、どのような行動が大切だとお考えですか。
<input type="checkbox"/>	この平和会館を訪れる若い世代の人に、展示品を通じて一番伝わってほしい、あるいは感じてほしいことは何ですか。
<input type="checkbox"/>	私たちと同じ若い世代の人にお話をされたときに、よくある反応や質問などがありますか。
<input type="checkbox"/>	今の日本は実際の戦争に巻き込まれることなく、ある意味「平和」ではありますが、そのため危機感が足りない指摘されることもあります。平和のために、私たちのような学生に期待していることはありますか。また、私たちができることがあるとすれば、それはどのようなことだとお考えですか。

第3章 平和スタディツアーへ

I 旅程の検討

鹿児島への2泊3日の平和スタディツアーを検討するにあたり、次の諸点を考慮した。

- ・天候不良などにより交通機関にダイヤの乱れが生じ、予定していた訪問ができなくなることは避けなければならない。とくに鹿児島への往復には飛行機を利用するため欠航があっても鹿児島へ行くことができるよう余裕をもったスケジュールを組む必要がある。
- ・そのため、1日目は京都から鹿児島への移動のみとし、同日夕刻から夜早めの時間にホテルフロントに集合し、参加者の確認と打ち合わせを行う。
- ・知覧特攻平和会館には2日目に訪問する。質問内容の事前確認は1日目のうちに済ませておく。また、質問者の役割分担を決めておく。
- ・知覧方面へのバスの本数が限られているため、朝早めに起床し、時間に余裕をもってホテルフロントに集合する。
- ・せっかく鹿児島へ行くのであるから1日目と3日目に時間の余裕がある場合には、各自でエクサカーションをすることを推奨する。
- ・エクサカーションの候補地は桜島、天文館、維新ふるさと館、鹿児島市電（路面電車）、西郷隆盛や大久保利通の銅像、鹿児島中央駅前観覧車アミュランなどがある。
- ・3日目は早朝もしくは午前の飛行機を利用する場合もあるため、宿泊施設で適宜解散し帰京する。

これらを考慮して決めたのが次の旅程である。

	日付	種別	時刻	内容	備考
1日目	3/22 (日)	移動	各地出発→21:00まで	自宅→鹿児島市内	経路 *ア
		集合	21:00	集合	宿泊施設に集合 各自チェックインを済ませること
		検討	21:00~21:30	ミーティング	
2日目	3/23 (月)	食事	7:00~8:30	朝食	
		集合	8:30	集合	宿泊施設ロビーに集合
		徒歩	8:30~9:00	宿泊施設→金生町バス停	
		移動	9:20~10:50	金生町バス停→特攻観音入口バス停	鹿児島交通バス
		訪問	11:00~14:00	知覧特攻平和会館	知覧特攻平和会館を訪問（途中昼食）
		巡回	14:00~15:45	周辺の戦跡巡り	周辺の戦争遺跡巡り
		移動	15:55~17:30	特攻観音入口バス停→金生町バス停	鹿児島交通バス
		徒歩	17:30~18:00	金生町バス停→宿泊施設	
		検討	18:00~18:30	ミーティング	
3日目	3/24 (火)	食事	18:30~19:30	夕食	
		移動	7:00~8:30	朝食	復路飛行機の出発時刻に合わせて各自適宜調整すること
		解散	7:00~10:00	解散	宿泊施設で解散 各自チェックアウトを済ませること
		検討	10:00まで→各地到着	鹿児島市内→自宅	経路 *イ

なお、受講生の予定を考慮した結果、2つのグループに分けて訪問することとした。第1グループは3月22日～24日の行程であり、第2グループは3月28日～30日の行程である。それぞれ、2日目に知覧特攻平和会館を訪問した。上記の旅程表は第1グループのものである。以下、第1グループの行程に基づき記述することとし、第2グループの行程に言及する場合には「第2グループでは」などと適宜表記する。

II 知覧特攻平和会館へ

(1) 知覧特攻平和会館までの道のり

2日目の朝、ホテルフロントに集合し徒歩で天文館の近くにある「金生町」バス停へ向かった。余裕をもってホテルを出たためバスの発車時刻まで時間があつた。その間に周辺を散策した。バス停の目の前には山形屋（やまかたや）という大きな百貨店があり、歴史を感じさせる重厚な竹まいの建物が、街を静かに見守っているように感じられた。周辺は商店街となっており、朝方だったこともあって人通りは少なかった。



2026. 03. 29 金生町バス停前「山形屋」デパート
手前に走っているのが鹿児島市電

金生町バス停からは「知覧・特攻観音入口」行きの鹿児島交通バス（9時23分発）に乗った（これを逃すと10時23分発まで1時間待たなければならない）。このバス停がバスの始発であるため、私たちは全員座席にすわることができた。鹿児島中央駅から十数名の客が乗ってきたため、なかにはすわることができず立ったままの人もいた。知覧へ向かう路線バスに乗るときは、始発の金生町バス停から乗ることをすすめる。

バスに揺られること約1時間40分、11時10分頃に特攻観音入口バス停に到着した。時刻表では10時51分に到着予定だったが20分程度遅れて到着したことになる。予約していた特攻平和会館での講和開始時刻が11時15分であり、5分前までに受付を済ませ、開始時刻には着席する必要があつたため、バスの遅れには大いに慌てた。バス停から会館入口まで歩く距離があり、その時間も考慮すると、ほぼ駆け足で会館まで行く必要があつた。会館入口に到着したのが11時15分、講和開始5分前の受付を完了できず、予約した時刻に着席することもできなかったが、会館の職員の方や講和をしていただく方が入口であたたかく出迎えてくださり、実際の到着となったことの申し訳なさが和らいだ。路線バスに1時間40分揺られたはるばるやってきた甲斐があつた。



2026. 03. 23 知覧特攻平和会館
前日まで雨だったが当日は雨も上がり時折晴れ間も

第2グループが訪問した日はバスの車窓から見える桜がとても美しかった。予想以上に多くの人を訪れていた知覧特攻平和会館周辺も桜がとても美しく咲いていた。悲惨な歴史を伝える建物が、満開の桜に彩られている様子は、過去の出来事の重さと現在の穏やかな景色との対比を感じさせ、強く印象に残った。



2026. 03. 29 知覧特攻平和会館 土曜日で来館者も多かった



2026. 03. 29 第2グループが訪問したときは桜が咲いていた

(2) 語り部の方の講和

到着後、講和室へ案内していただいた。10名以上の団体に予約した場合、個別に講和をうかがうことができる。当クラスでは2つのグループに分かれて訪問したが、第1グループは13名で訪問したため個別講和をお願いすることができた（当クラスのためだけに語り部の方のお話をうかがうことができる）。第2グループは3名で訪問したため個別講和ではなく、他の多くの来館者とともに一般来館者向け定時講和を拝聴した。

第1グループ訪問時の個別講和をご担当くださったのは、知覧特攻平和会館で「語り部」をされている桑代照明さんである。桑代さんは、警視庁をご定年で退職されたのち、2018年から語り部をされている方である。知覧のご出身でお母さまが「なでしこ隊」として特攻隊員のお世話をされていたという。⁶ 特攻隊員の身の回りの世話や出撃の際の見送りをした、知覧高等女学校の女学生を「なでしこ隊」といい、お母さまは15歳のとき「なでしこ隊」の一人として23日間特攻隊員の身の回りのお世話をされていたそうである。桑代さんによると、お母さまは戦争で非常につらい経験をされたため、長い間、自らの体験を語ることを拒んでいたという。しかし、戦争を経験した人々が年々少なくなり、人々の記憶が薄れていくことを危惧し、若い世代に事実を伝えたいという思いから、ようやく重い口を開かれたそうである。その経緯を聞くだけでも、戦争の凄惨さがうかがえる。お母さまは特攻隊員たちのことを「生き神様だった」とよくおっしゃっていたという。その言葉からは、死を覚悟しながらも国に残された自分たちや未来の人を守るために、任務へ向かっていった隊員たちへの深い尊敬や複雑な思いが感じられた。桑代さんからは、お母さまから聞かせてもらった話もふまえて、特攻の歴史的背景や特攻隊員の遺書・手紙等の特色について解説をしていただいた。



2026. 03. 23 知覧特攻平和会館の講和室にて
語り部の方のお話を聞く前のようす（スクリーンには「命の尊さ・平和を語り継ぐまち知覧 ようこそ知覧特攻平和会館へ 龍谷大学法学部様」と書かれている。あたたかくお迎えくださり、ありがとうございました）

⁶ 知覧特攻平和会館ウェブサイト <https://www.chiran-tokkou.jp/storyteller.html>（閲覧日 2026年6月10日）。



2026. 03. 23 お話を聞かせていただいたあと質問しているようす
回答してくださっているのが桑代さん（画面右）

最初に見せていただいたのは、知覧飛行場から出撃する 30 分前の特攻隊員の優しい笑顔。その笑顔を残して出撃する。知覧から攻撃対象の沖縄・慶良間（けらま）諸島沖までは約 650km、2 時間 30 分から 3 時間かかったという。そして、実際に特攻が成功したのは 1 割程度だったのではないかとされている。講和では続けて何名かの特攻隊員の写真と遺された手紙などの遺品をスライドで見せていただきながら、お話を聞かせていただいた。特攻隊員はみな若く、17 歳～18 歳の若者もいた。井花敏男少尉（17 歳、1945 年 4 月 16 日知覧から出撃）。学徒出陣の大学生もいた。穴澤利夫大尉（23 歳、1945 年 4 月 12 日知覧から出撃）。穴澤大尉は婚約者への手紙を遺しており、その手紙からは死んでいく悔しさや結婚できない悔しさがにじみ出ており、しかし同時に婚約者の幸せを願う言葉で満ちている。穴澤大尉は婚約者から贈られたマフラーを巻いて出撃した。⁷ 穴澤大尉からの手紙を婚約者は 4 月 16 日に受け取っているが、当時は検閲があったはずであり、婚約者に会いたいという内容を含む穴澤大尉の手紙は検閲に引っかかる可能性があったはずだ。この点を受講生から質問したところ、知覧では検閲をする時間的な余裕がなく、ほぼそのまま送られていたのではないかという。穴澤大尉の婚約者が桑代さんのお母さまと一緒に写っている後年の写真も見せていただいた。

桑代さんによる講和の中には、出撃したものの飛行機の故障によって特攻作戦を完遂できず、生き延びた方の話があった。知覧の基地から出撃し、作戦海域に至るまでには 2 時間以上かかり（2 時間半から 3 時間といわれる）、その間、一人で最期の時を迎えるまでさまざまな思いが巡る中、最後にはやはり父や母への思いが最も強くなり、泣きながら飛んでいたと語られていた。もちろん、戦果を挙げ国のため特攻を行うことを第一に考えて出撃した隊員も多くいたと思う。しかし、全員がそうではなく、戦争そのものより家族を思っていた人もいたという話を聞き、私たちと近い年齢の若者が抱く感情には、今と通じる部分があるのだと感じた。

第 2 グループは、上述のように、3 名で訪問したため個別講和ではなく他の多くの来館者とともに一般来館者向け定時講和を拝聴した。定時講和の前に、視聴覚室で DVD を 30 分間視聴し、⁸ その後少し間を置いて 13 時から講和をうかがった。お話をしてくださったのは

⁷ 知覧特攻平和会館のウェブサイトにはオンラインミュージアムがあり、デジタルアーカイブを閲覧することができる。穴澤利夫大尉が婚約者（恋人）に遺した手紙が掲載されている。https://www.chiran-tokkou.jp/digital_archive/10（閲覧日 2026 年 6 月 10 日）。

⁸ 知覧特攻平和会館入口から入ってすぐのロビーや展示室、遺品室などにもモニターがあり知覧飛行場の歴史やなでしこ隊の話などの映像が常時放映されているが、それらとは別に、視聴覚室において定時開催の DVD 映像上映がある。映像では遺書や遺品が紹介され、それらに込められた特攻隊員の思いや、今に生きる私たちへのメッセージを感じ取ることができる。第 2 グループは 12 時からの上映を視聴した。

田代良民さんである。田代さんは知覧町役場、南九州市役所を経て2022年から語り部をされている方である。⁹ 田代さんは、特攻隊員が遺した遺書や手紙、遺品のいくつかを紹介してくださり、最後に次のようにおっしゃっていた。今から80年前は、明日を生きようにも生きることができない人たちがいた。今日、この平和会館へ来ていただいた方々をお願いしたい。命の尊さ、平和の大切さ、家族愛・・・特攻隊員たちは、戦争が終わったら、後に残った人たちが日本を建て直してくれるだろうと考えていたはずだ。ここに遺されている言葉から、命の大切さを、平和について、感じてほしい。¹⁰

定時講和を拝聴した後しばらく展示物を見ていたところへ、田代さんが来られ、知覧特攻平和会館の絵葉書と数年前の『あした いのち かがやけ』を2冊恵贈していただいた。

『あした いのち かがやけ』をいただかなければその存在を知ることなく私たちは平和会館を辞するところであった。また、絵葉書は、特攻隊員の遺書や手紙に書かれていた言葉と平和会館のようすがわかる写真で成り立っている。平和の大切さを伝える重要なツールである（授業担当教員は最新の『あした いのち かがやけ』を売店で購入していた。『あした いのち かがやけ』については本稿の最後に紹介する）。



2026.03.23 撮影 海軍零式艦上戦闘機が展示されている
長年海中にあったことによる劣化によって無残な姿であったが
戦闘機の大きさやむき出しになっている機銃から戦争のリアル
を感じ取ることができる

⁹ 知覧特攻平和会館ウェブサイト、前掲・注6（閲覧日2026年6月10日）。

¹⁰ 田代さんによる定時講和は30分間であり、個別講和ではないため質問の時間がとくに設けられていたわけではない。しかし、第2グループでは、講和終了後に田代さんのもとへ行き、龍谷大学から授業の一環で訪問していることを伝え、少しでも質問をさせていただいた。講和のあとかたづけや次の業務のご準備などお忙しくされている最中にお尋ねすることとなりたいへんご迷惑をおかけしたと思われる。そのようななかご回答いただき、ありがとうございました。



2026. 03. 29 撮影

*なお、館内のほとんどが撮影禁止であり撮影できる場所は限られている

(3) 知覧特攻平和会館のまわりを散策したのち鹿児島市内へ

館内に展示されている特攻隊員の遺影や遺書、手紙、鉢巻き、人形、戦闘機などを見て回り、その前後の時間を利用し、平和会館の周辺を散策した。知覧特攻平和会館の周辺には、一式戦闘機「隼」や、特攻勇士の像、特攻平和観音堂、灯ろう、油脂庫、弾薬庫、その他の戦争遺跡などがある。知覧への平和スタディツアー企画時は、「特攻の母」として知られる鳥濱トメさんの「富屋食堂」を復元した資料館（「ホテル館 富屋食堂」）や富屋食堂の味を引き継いだ食事処である「知覧茶屋」にも行きたいと考えていたが、バスで到着した午前11時から帰りのバスが出発する夕刻16時少し前までの間に、それらを訪問する時間的な余裕はなかった。もっとも、「ホテル館 富屋食堂」はバス路線に沿った場所にあり、「知覧茶屋」は平和会館最寄りのバス停から平和会館に向かう途中にあることから、それぞれ外観を見ることはできた。

講和のなかで紹介された三角兵舎に行ってみた。特攻隊員は平均年齢約20歳前後、最年少では17歳ほどの若者たちで構成されていた。彼らは全国各地から鹿児島県知覧に集められ、出撃までの間、飛行機の操縦訓練などを受けながら、三角兵舎と呼ばれる宿舎で生活していたそうである。三角兵舎は敵に発見されにくいよう木々の中に隠す形で造られた木造の竪穴式住居のような建物で、屋根には杉の幼木を乗せて偽装し、内部は狭く、圧迫感のある空間だった。そのような場所で若者たちが日々暮らしていたことを思うと、胸が痛んだ。三角兵舎では、なでしこ隊の女学生が特攻隊員に声をかけられるような状態ではなかったという。ほとんどが物静かで騒いでいる人はいない。簡素な寝床を備えた三角兵舎で隊員たちは日の丸に寄せ書きを書き、故郷の家族へ手紙や遺書をしたため、静かに死を受け入れていった。死に対する恐怖や、「親、きょうだい、愛する人が助かるなら」と死への決意を固めるなど、さまざまなジレンマや葛藤のなか、三角兵舎で泣いている特攻隊員もいたそうである。

三角兵舎は当時使用されていた様子がそのまま再現されており、生活の雰囲気強く感じることができた。硬い枕や、寝返りも十分にできないほどの小さな布団が置かれており、限られた環境の中で生活していたことが分かる。壁沿いにはかばんやヘルメットが並べられ、当時の持ち物や生活の様子が具体的に伝わってきた。また実際の写真も展示されており、当時の空気感がよりリアルに感じられた。枕元に女学生が作った人形が添えられていたことも印象的である。孤独や不安の中で、その人形が心の支えや安心につながっていたのだろう

（後述のように人形は家族から送られてきたものも多いという）。特攻平和観音堂では戦没者を慰霊する静かな空間が広がっており、訪れる人々の祈りの気持ちが感じられた。防火水槽や給水槽、弾薬庫などの施設も実際に見学することができ、当時の軍事施設が非常に計画

的に整備されていたことが分かった。特に弾薬庫では、実際に弾薬が保管されていた空間を間近で見ることができ、戦争が現実のものであったことを強く実感した。全体を通して、当時の生活や出撃準備の厳しさを具体的に想像する機会となった。

周辺を散策している途中で、畑の上で日向ぼっこをしながら眠っている猫を見つけた。かつては常に死と隣り合わせの緊張状態にあった場所が、現在では動物が安心して過ごせるほど穏やかな環境へと変わっている。過去の戦争の歴史と現在の平和な日常との対比が強く印象に残り、この地が長い時間を経て大きく変化したことを実感した。

周辺を散策した後、特攻観音入口バス停 15 時 56 分発の鹿児島交通バスに乗車し鹿児島市内へ戻った。途中晴れた空の向こうに浮かぶ桜島を眺めながら 1 時間 40 分程度バスに揺られ金生町バス停に到着したのは 17 時 40 分前後であった。



2026. 03. 23 三角兵舎 知覧特攻平和会館横の杉林に復元したものの特攻隊員たちが出撃するまで起居していた半地下式の建物
地面を掘ったところに建てているためじめじめとしていたらしい



2026. 03. 23 三角兵舎 中のようす

写真で撮ると明るく見えるが実際にはもっと暗かっただろう。これまで、戦争や特攻は教科書の中の「昔の出来事」だどこかで思っていた。しかし、敵に見つからないように半地下に作られた薄暗い兵舎に入り、隊員たちがここで最後の数日を過ごし、遺書を書いたのだと想像した時、その考えは変わった。私たちと同じような若者が、確かにこの狭い場所で悩み、最後の時間を過ごしていた。本物に近い空間に実際に入ってみたことで、特攻が本当にあった悲劇だと肌で感じる事ができた。



2026. 03. 23 一式戦闘機「隼」



2026. 03. 29 灯ろう 3～5分咲の桜がきれい



2026. 03. 29
知覧飛行場弾薬庫



2026. 03. 29
知覧飛行場防火水槽跡



2026. 03. 23
知覧特攻平和会館正面入口前で
第1グループ



2026. 03. 29 知覧特攻平和会館正面入口前で 第2グループ

Ⅲ 感じたことや考えたこと

鹿児島・知覧への平和スタディツアーを企画し実際に訪問して感じたことや考えたことをまとめるとおおむね次のようになる。

(1) 特攻隊員と家族

特攻隊員の家族は、物資不足の中でも着物などの布を集め、人形を作って持たせたという。その人形を自分の分身として大切に作る人もいれば、家族の姿と重ねて心の支えにする人もいたそうである。中には、その人形と共に出撃した隊員もいたという話が強く心に残った。隊員の中には、突撃をする沖縄までの約2時間半の間1人だからと、女学生が作った人形を連れて行った者や、特攻隊員は遺骨がほとんど残らないことから、人形に爪や髪を入れ、家族等に送った者もいたという。

当時の隊員たちは、ただ悲観していたわけではなく、親を大切にする価値観が非常に強かった時代背景もあり、親を心配させまいと気丈に振る舞っていた人も多かったという。そこからは、当時の若者たちの責任感や家族への思いが伝わってきた。

知覧特攻平和会館には数多くの資料が展示されており、特攻隊員の方々の遺書や遺品のほかに、飛行機の移り変わりや、特攻に関わりのある方々が当時の様子について話されている動画などが展示されている。なかでも遺書が多く展示されており、特攻隊員たちの顔写真や名前と合わせて遺書を見ると、今の私たちと近い年齢の若者たち一人ひとりの思いが綴られており、非常に生々しく、最も心を揺さぶられた。館内の至る所に展示されており、すべてを見て回るにはかなりの時間を要する。それだけ多くの命が失われたのだと考えると、胸が締めつけられる。

桑代さんによる個別講和で最初に見せていただいた特攻隊員の写真のように、出撃前の写真には特攻隊員たちの笑顔がある。「親が写真で見る顔は笑顔がいい」という思いから、特攻機の前で笑顔を浮かべていたのではないかと。写真の中の彼らは私たちと同じような若者で、それにもかかわらず、死を覚悟して笑顔を見せている姿には、言葉では表せない複雑な感情が込められているように感じた。

遺書や手紙は兄弟や父親に対するものも多いが、いちばん多かったのが母親に対するものであり、とくに感謝の気持ちを伝えるものが多かった。桑代さんによると、遺書は父親に対するものよりも、母親に対するもののほうが圧倒的に多く、特攻隊員たちの最期の言葉には、恋人や家族、特に母親に向けて書かれた手紙が多かったという。今まで親孝行できなかったことを申し訳なく思う気持ちと、特攻隊員として国のために戦死することが最初で最後の親孝行になるということが若い隊員の手紙の多くに綴られていた。子を持つ隊員の手紙には、まだ幼い我が子に向けてこれからの人生について、今までのことについて、全て片仮名で書かれた手紙もあった。全て片仮名で書くのは当時の国民学校では片仮名を始めに習うためである。子供が自分で読めるように。出撃20分や10分前に書かれた手紙も多かった。隊員たちの最後の思いが綴られているのである。これらの手紙に接するだけでも、いくら国のためとはいえ多くの悲しみと別れがあったことが分かる。とても悲しく辛い内容であった。

特攻隊員の方々が書いた手紙を読む中で、「笑顔で別れます」や「私が軍人として死ぬることを喜んでください」「国のために散れることを光栄に思う」などの言葉が多くの手紙に見られ印象に残った。平和会館を訪問する前の想像では、もっとこの世に対する未練や置かれた状況へ恨み、自分の最後を悟りながら突撃する怖さ、家族と会わずに別れる辛さが綴られていると思っていた。もちろん、隊員たちにそのような気持ちが全くなかったわけではないことは映像資料や田代さんの講話からわかるのだが、国のためにという意識も強かったのだろう。事実、当時は国のために死ぬことは光栄なことという教育がされていた。この点は受講生間で事前に質問を検討していたときにも出された関心事である。特攻隊員たちがどのような思いで出撃していったのかについての説明のなかで、当時は国のために尽くすことが強く求められていた時代であり、自分の気持ちだけで自由に行動できる状況ではなかったという話を聞いた。この話から、戦争は人々の考え方や生き方にまで大きな影響を与えるものなのだと感じた。

桑代さんは、国に残された、自分を大切に思ってくれている人たちへの深い思いを抱えながら、隊員たちは出撃していったのではないかとおっしゃっていた。実際に展示されていた手紙には、国を思う気持ちに加え、家族への感謝や気遣いが数多く記されており、自分の死を目前にしてなお家族を安心させようとする優しさや、その裏にある本当の気持ちを押し殺しているような苦しさも強く感じられた。文章の一つ一つに強い思いが込められており、読んでいるだけで胸が締め付けられるような気持ちになった。知覧特攻平和会館は、息子を送り出した母親たちの悲しみや思いが展示の根底に流れていることや、母親をはじめとする遺族の視点に寄り添った展示が多いという点に独自の特徴があるということが理解できた。

(2) 特攻隊員のまわりにいた人々

特攻隊員を支えたなでしこ隊の女学生や上官たちにも大きな苦しみがあったことを教わった。なでしこ隊の女学生の立場に立てば日頃から身の回りのお世話をしてきた若者たちが、突然翌日に死ぬことになるのである。命令を下す上官の側も、言葉では表せない葛藤があったはずだ。隊員たちへの出撃命令は数日前に伝えられ、隊員たちはそこで初めて、自らの死が目前に迫っていることを現実として受け止めたそうである。そして出撃前夜には、普段とはまったく異なる豪華な食事が用意されたという。しかし、翌日に死を控え、食事が喉を通らない人も多かったそうだ。また、「自分は明日死ぬのだから」と言って、なでしこ隊の人々に食事を勧める隊員もいたという。

田代さんのお話のなかで、女学生が手を振りながらも特攻隊員と目を合わせなかった理由が印象に残っている。出撃する隊員たちを見送る彼女たちはほとんど皆下を向いており、しかし涙を流している者はいない。それは、見送りの場で涙を見せてはいけないことになってきたからだという。今まで身の回りの世話をし、関わりを持ってきた隊員たちの顔を見ると涙が出でしまうから下を向いているのだ。当時は戦争が日常となっていた時代であり、特攻隊を支える立場として冷静に振る舞っていたように見える一方で、実際には心の中では深い悲しみを抱えていたことがうかがえた。心の中では共に過ごした日々を思い出し、涙をこらえきれなかったにちがいない。同年代の若者が戦地へ向かうという現実、現代に生きる私たちには想像しきれないほど過酷であり、別れの重さを強く考えさせられた。

(3) 特攻隊や特攻作戦など特攻について今どのように評価できるか

桑代さんのお話のなかで、受講生の多くが深く印象に残ったと感じたことがある。それは、当時と現代とでは価値観が大きく異なるため、今を生きる私たちが、当時の人々の行動を美化したり、単純に「正しい・間違っている」や、善悪だけで判断したりしてはならないということである。当時を生きた人々や、特攻隊員として出撃していった人々の思いや時代背景を学ぶ中で、「現代の価値観だけで過去の戦争や特攻を単純に善悪で判断してはならない」という言葉について深く考えさせられた。特攻は、本土への被害を防ぐための最後の手段として行われたとされ、決して美化できるものではない。しかし、当時の人々にとっては、国を守るための行為として受け止められていた側面もあったのだと思う。桑代さんがおっしゃっていたように、現在の価値観だけで簡単に決めつけるのではなく、その時代の人々がどのような状況に置かれ、何を思い、どのような選択をせざるを得なかったのかを理解しようとする姿勢が大切だと感じた。また歴史から学ぶ際は一面的な見方ではなく、様々な視点で向き合う姿勢が大切であることを学んだ。

(4) 若い世代への継承

桑代さんは、特攻について若い世代に伝えていく中で事実そのものを伝えていくということを大事にされていた。事実そのものを伝えていくことで遺書や遺品などに残された特攻隊員の方々の心や思いを伝えることができると話されおり、事実をありのまま話すことで私たちはそのまま受け取ることができ、特攻について考えやすくなると感じた。特攻を美化するのではなく、会館では個々の隊員のエピソードを丁寧に語り伝えることを大切にしており、「良い面だけを見せない」という姿勢を意識的に保つことで、戦争の実態を正面から伝えようとしている。歴史の記録として何を残し、どう伝えるかという問いに、会館は今も向き合い続けていることが理解できた。

特攻隊員たちのそのまの言葉を通して「命」や「家族」の大切さ、親孝行の大切さ、そして残された私たちが、平和の尊さ、そして「当たり前」の日常に感謝することの大切さを次の世代へ紡いでいくことが重要だと語られていた。その際、今の若い世代の人たちの考え方の特性を知ったうえで伝えていくようにしているとのことであった。

壁一面に展示されていた写真を見ていると、特攻隊員たちは決して特別な存在ではなく、現在の私たちと変わらない普通の若者だったことがよく分かる。多くの夢や大切な人たちを抱えている彼らが、戦争という極限状態の中で、その命を自ら絶たなければならなかったことに対し、戦争が人々から奪うものの大きさを改めて重く感じた。また、写真に写る少年たちは、私たちと同年代であるはずなのに、どこか大人びた表情をしており、とても同じ世代とは思えないほどしっかりとした印象を受けた。一方で、訓練の厳しさを感じさせない無邪気な笑顔もあり、その輝きがより一層胸に残った。その数日後には多くの少年が命を落としているという事実は、私たちに、言葉にできないほどの悲しさと重み感じさせる。遺書には家族への思いや日常への未練が綴られており、それぞれの短い人生の現実が静かに伝わった。なかに19歳の特攻隊員の遺書があった。今の時代なら守られるべき立場にある19歳という若さでありながら、自らの死を覚悟して出撃していく。つい最近まで私たちは19歳だった。同じ守られる存在であるはずの若者が、このような形で命を落とさなければならなかったことに、深い悲しみを感じる。未来ある若者が命を落とすことが当然のように扱われる状況は決して繰り返されてはならない。

館内の展示は静かな雰囲気の中で丁寧に並べられており、一つ一つの言葉や遺品がより重く感じられ、真剣な気持ちを持ち集中して見学することができた。命の尊さや平和の大切さをここまで深く感じることはできたのは、知覧特攻平和会館に来ることができたおかげである。

知覧特攻平和会館の訪問を終えた後、再び1時間30分ほどバスに揺られ鹿児島市内へ戻ったが、帰りのバスでは行きとは違った見方や気持ちだったことを今でも覚えている。何気ない日常や平和な時間を過ごすことができていることを知り、「当たり前」の日常のありがたさや平和の大切さを胸に刻んだバスの中だった。

IV エクスカーション

平和スタディツアーは、「戦争や平和について考えるときは真剣に」「それ以外の時間は楽しく愉快地に」を合言葉に企画してきた。

遠路はるばる鹿児島へ来たので、時間を見つけて、エクスカーションも楽しんだ。関西から鹿児島までの往復は飛行機を利用したため、午前の便を利用した者は朝早く起きて各空港へ向かった。鹿児島空港へ降り立つ飛行機からは、3月22日は雨模様であったが、自然豊かな山々や海などの景色を見ることができた(第2グループの3月28日は春霞ながら晴れていた)。鹿児島空港からは空港連絡バスを利用して鹿児島市内へ移動した。広い道路や自然の多い風景が見え、関西ではあまり見られないような南国の木々が迎えてくれた。とても温暖な気候である。

鹿児島市内では食事をとったり、鹿児島市電(路面電車)に乗ったり、大きな繁華街である天文館へ立ち寄りして、鹿児島を満喫した。鹿児島名物である黒豚とんかつは普段食べるとんかつよりも柔らかく、ほかにも黒豚のしゃぶしゃぶ、鹿児島ラーメン、シロクマのかき氷など、鹿児島名物を味わった。鹿児島市電は地元の方々にとって欠かせない重要な、そして便利な公共交通機関である。線路の芝生がまぶしかった。



2026. 03. 30 鹿児島市電の路面電車
天文館の近く
天然芝が敷かれている
かつては芝刈り専用の車両があったという

桜島を見渡せる場所に行くと、写真で見るよりも大きく、鹿児島が火山とともに発展してきたことが分かる。鹿児島地方裁判所や大きな鳥居が印象的な照国神社、照国神社の近くには西郷隆盛銅像、そして我らが本願寺鹿児島別院がある。



2026. 03. 29 本願寺鹿児島別院 龍谷大学の看板が掲出されている（画面左下）

3日目は帰りの飛行機の出発時刻に合わせて、鹿児島市内から空港行きのバスに乗り、鹿児島空港から飛行機で関西方面へ戻った。

帰りの飛行機が午後遅めの出発の場合、桜島や仙巖園へ足を運ぶことができた。宿泊先のホテルからほど近いところに桜島行きのフェリー乗り場があり、桜島へ向かった。桜島では火山を望む展望台などが有名であるが、その日のうちに帰らなければならず十分な時間がなかった。それでも月讀神社への参拝と桜島名物である「桜島小みかん」のソフトクリームを堪能することができた。月讀神社は少し上がったところにあったため、桜島の景色を一望することができた。仙巖園は島津家ゆかりの庭園であり、反射炉の跡地など、日本史の教科書でしか目にしないような歴史的遺産が数多く残る場所でもある。広い庭園からは桜島や錦江湾を眺めることができ、圧巻で息をのむような景色であった。園内には弓矢体験もできる。また、仙巖園には、島津義弘（戦国武将として有名でとくに関ヶ原での「島津の退き口」はよく知られている）が戦に猫を連れて行ったことにゆかりを持つ「猫神社」（ねこがみしゃ）がある。猫好きにはたまらない場所である。仙巖園の外にも資料館があり、そこでは仙巖園とゆかりのある歴史についても知ることができるようになっている。



2026. 03. 24 仙巖園の広大な庭から見た桜島 噴煙が上がっている

なお、関西空港から鹿児島空港への peach 航空は、3月22日午後の便（MM197 便）が欠航となったため（理由は天候ではなく「機材練りのため」）、急きょ新幹線に変更して鹿児島まで移動した受講生もいた。新大阪駅から鹿児島中央駅まで新幹線で約4時間30分かかったがその日のうちに鹿児島に到着できた。2泊3日の行程を組んで助かったケースである。欠航の情報を朝のうちに把握した受講生は新幹線に変更できたが、関西空港に着いてから欠航を知った受講生は鹿児島行きを断念せざるを得なかった。このようなケースは飛行機利用に時折生じることでありよい経験になった。



2026. 03. 24 鹿児島空港から受講生を乗せた peach 航空が出発した

おわりに

2026年4月から、成果報告書の原稿執筆作業に入った。

同時に、鹿児島・知覧への平和スタディツアーをふりかえったとき、私たちと同じ若い世代の多くの人に、ぜひ知覧特攻平和会館を訪れてほしいと思い、いくつかアイデアを出し合った。

未来において同じことを繰り返さないために過去から学び、今を生きる。過ちから得られる教訓は継承するが、同じ過ちを未来へ引き継がない。戦争を選択しない。戦争の惨禍を招

いた国家の責任を私たちが背負うのはなぜか。そのようなことを考えながら、原稿を執筆し、平和会館を多くの若者に訪れてほしいと思った。



2026. 05. 20 授業のようす 龍谷大学和顔館の教室にて
若い世代が知覧を訪れるアイデアを出し合っている

知覧特攻平和会館のウェブサイトはとても見やすく資料もたくさん掲載されている。事前学習のための素材も充実している。入館予約の入力画面も分かりやすかった。VR (Virtual Reality : バーチャル・リアリティ、仮想空間、仮想現実) を活用した「ヴァーチャルツアー」を導入することもあり得るかもしれないが、私たちが実際に訪問した経験をふまえると、平和会館にはぜひ足を運んでほしい。ヴァーチャルよりも実物を見たほうが格段に胸に訴えかけてくるものがある。それに、特攻隊員たちの写真や遺品、遺書、手紙などはいずれもご遺族からの「ここなら預かってもらって大丈夫。展示してもらってよい」という平和会館への信頼のもとに安心して預けられたものばかりだという。特攻戦死した若い隊員へのご遺族の深い愛情をもったまま、それらは館内に展示されている。そのような遺品が展示されていることもあり、写真撮影はほぼ全面的に禁止されている。

そうすると、平和会館を実際に訪問しやすくする工夫を考えたいほうがよいだろう。たとえば、次の諸点が考えられる。

- ・ 鹿児島空港もしくは鹿児島市内を出発し知覧まで向かう「戦争と平和を考える日帰りツアー」を企画・実施する。平日はさほど多くの利用は見込めないため、せめて週末にあたる土曜日と日曜日、ゴールデンウィークのような連休期間中、夏休みや春休みといった長期休暇期間に、毎日は無理かもしれないが、定期的にツアーを実施してはどうだろう。このツアーには、個人でも申し込むことができるものとする。そうすると、路線バスではなく、観光用のバスを利用することになり、比較的快適に知覧までの往復移動ができる。

- ・ 路線バスの場合でも、鹿児島市内から知覧に向かうノンストップ直行バス（もしくは主要バス停のみ停車）があってもよいだろう。午前9時の開館時刻に合わせて、鹿児島市内を7時30分に出発する直行バスを走らせ、その後は午前中だけでもよいので毎時30分発の直行バスがほしい（10時30分発までの4本あれば十分である）。閉館時刻に合わせた知覧から鹿児島市内に向かう直行バスも13時45分発から16時45分発まで1時間に1本必要である。

- ・ 知覧特攻平和会館の周囲を歩いて見て回ることができる戦争遺跡もあるが、そのほかにも戦争遺跡などが広範囲に渡っている。たとえばホテル館富屋食堂（資料館）がある場所から集団司令部跡（石碑）がある場所まで、あるいは、なでしこ隊見送りの地まで、距離があり歩いて見て回るのは困難が伴う。そこで、平和会館への来館者が多い日に限定してよいので、午後2時間程度で周辺戦跡をめぐる平和会館発着のツアーを企画してはどうだろう。平和会館へは午前中に訪問し、13時から2時間の周辺めぐりバスツアーである。

・学校やクラス単位で訪問する場合、訪問前に事前学習をすることが多いだろうから、平和会館の語り部の方に、事前に学校やクラスへ来ていただき講和を聞かせていただくと、充実した事前学習になるかもしれない。

・平和会館の近くで催しものを開催して、催しものへの来訪者とあわせて多くの人が来館することを期待してもよいだろう。現に第2グループが訪問した3月29日には、平和会館のすぐ近くにある大きな広場（知覧平和公園自由広場）でお花見も楽しめるイベント「桜のおもてなし」が開催されており、多くの家族連れが訪れていた。また、平和会館すぐ近くの球場（知覧平和公園多目的球場）ではソフトボールの春季全日本小学生女子大会が開催されており（大会は3月27日～29日）、3月29日は決勝戦があった。ソフトボール小学生女子の日本一を決める大きな大会である。¹¹ 第2グループが訪問した日、ソフトボールチームの選手や指導者、保護者と思われる人が多く平和会館にいた。



2026. 03. 29 「桜のおもてなし」のようす 知覧平和公園自由広場
地元名産の食べ物を買っていた受講生もいた

・財政面については知覧という場所自体をPRしてクラウドファンディングを行ったり、ふるさと納税を推進したりすることも考えられるが、知覧特攻平和会館所在の南九州市では、すでに、ふるさと納税（寄附）を募っており、その一部を平和事業に充てている。たとえば、2025年には平和会館企画展開催事業の実施に1,375,000円、平和へのメッセージfrom知覧スピーチコンテストの開催に14,645,000円がそれぞれ充当されている。¹²

・平和へのメッセージfrom知覧スピーチコンテストは、毎年8月15日に南九州市知覧で開催されている。「あした いのち かがやけ」をテーマに全国から広く参加者を募集し世界の恒久平和を願って平和へのメッセージを発信するコンテストだ。スピーチコンテスト作品の中から選ばれた入選作品を掲載しているのが、作品集『あした いのち かがやけ』であり、田代さんから当クラスへ恵贈していただいた2冊の本はこれのことである。全国の小学校と中学校に配布しいつでも子どもたちが読めるように配架したい（全国配布の費用は文部科学省が手当することが想定される）。もちろん応募が推奨される。知覧特攻平和会館の絵はがきも活用したい。

¹¹ 公益財団法人日本ソフトボール協会ウェブサイト

https://www.softball.or.jp/game/primary_school_girl/tournament2025/spring_tournament.html（閲覧日2026年6月10日）

¹² 南九州市ふるさと納税特設サイト「寄附金の使い道」<https://furusato-373.jp/work/>、
ならびに、「活用事業のご紹介」<https://furusato-373.jp/work/case.php>（いずれも閲覧日2026年6月10日）



『あした いのち かがやけ』 2026.06.15 撮影
田代さんより恵贈いただいた2冊（中と右）と最新本（左）
ご恵贈いただきありがとうございます